新々 私の週末料理日記

その27

10月△日日曜日

近く職場のゴルフコンペがあるので、昨日近所の練習場で猛練習したせいか、腰と肩がやたらに痛い。今日はプールに行こうと思っていたが、あっさりと予定を中止。休養専一に決心変更。大根とねぎの青いところを刻んだ味噌汁と、鰈の干物と納豆と梅干の朝飯を食べたら、再び寝床に戻る。時期遅れの台風の影響か、やたらに暑いのでごろごろしても寝つけない。

数か月前に買い込んで窓際に積んだまま忘れていた「IT全史　情報技術の250年を読む」（中野明著、祥伝社）という本を、寝転んだままぱらぱらとめくり始める。「情報化時代の必須知識がしっかりわかる」という帯の文句に釣られて実用書のつもりで買ったのだが、本の中身は帯の紹介とはかなり異なる。産業革命のあとにフランスで腕木（うでぎ）通信と呼ばれる情報技術が誕生した1794年から、レイ・カーツワイルがいわゆるシンギュラリティに到達すると予言する2045年の前年までの250年間を視野に、情報技術の歴史を、著者一流の概念整理と史観に種々のエピソードをちりばめつつ概説したものである。

何と言っても興味深かったのは、IT全史初頭の腕木通信の章である。フランス革命後文字通り四面楚歌のフランスにおいては、国境近くと中央政府を結ぶ高速通信の必要性は極めて高かった。まさにそのような状況下で、クロード・シャップが考案した腕木通信は、パリと北部フランス英仏海峡近くの町リールとの間の204kmを、一つの信号あたり120秒で送ったという。これは秒速1700mすなわち音速の5倍である。

腕木通信の具体的な仕組みは、約10km間隔で設置した通信基地の屋上に立てた4〜5mの柱の先端に取り付けられた4m程度の調節器と称する可動式の腕木と、その両端にそれぞれ取り付けられた2m程度の指示器と称する可動式腕木の位置を、基地内部のハンドルを操作して特定の信号を作ることにより、情報をやり取りする。各基地には通信手が常駐していて、望遠鏡で両隣の基地の信号を常時確認して自分の基地の腕木も同じ形状の信号に変化させる。それをバケツリレー式に伝達していくのである。調節器は水平、垂直の2か所を指し、2本の指示器は7か所の位置を指す仕組みだったから、2×7×7の98種類の信号を作ることが可能で、そのうち紛らわしいものを除いた92種類の信号を使用していた。92ページ92行の符号表（コードブック）を送受信者の手元に置き、何ページ何行目というふうに信号を送り、該当する用語や文章を読み取ったのである。このように腕木通信で送られる信号は完全にデジタル化されたものであったが、著者は、これに加えて腕木通信には、現代のインターネットと注目すべき技術的な共通点があると指摘する。

まず、腕木信号では、メッセージの先頭に緊急度を示すコントロール信号がつけられたが、これはインターネットにおいてデータに付されるヘッダー情報と実質的に同じ概念だとする。また、腕木通信では符号表のボキャブラリーにない単語を送信するときは、単語をアルファベットで送信する必要があったが、符号表上アルファベットは他の単語や文章と番号を共有していたので、初めに「ここからアルファベットが始まります」の信号を送り、アルファベット送信が終了するときには終わる旨の信号を送ることになっていた。著者は、この初めと終わりの信号は現在のHTMLにおけるタグの概念に相当するものだと指摘する。

因みに腕木通信は、ギリシャ語からの造語で、「テレ＝遠くに」と「グラーフェン＝書くこと」からテレグラフと命名された。後に電信が生まれた当初、電信はエレクトリック・テレグラフと呼ばれたという。テレグラフの本家本元は、腕木通信だったのだ。

画期的な情報技術である腕木通信のネガティブな側面として、著者は史上初のネットワーク犯罪を挙げる。当時、パリの株式市場の情報は郵便馬車で5日かけてボルドーに送られ、ボルドーではそれをもとにして株式売買が行われていた。そこで政府の腕木通信回線を不正使用し、早く情報を仕入れて儲けようと、腕木通信の監督官や通信手を仲間に引き込んで大儲けした悪党が出た。しかしやがて明るみに出て一味は逮捕されるが、博学な著者は、これを題材にした小説を紹介してくれる。文豪デュマの「モンテ・クリスト伯」である。はて、「モンテ・クリスト伯」。ずいぶん昔に一読したことがあるはずだが、腕木通信なんて出てきたかしらん。

出てくるのだ。私が引っ張り出してきた岩波文庫版でいうと、第4巻の半分を少々過ぎたあたりに、「信号機」という章と「桃をかじる山鼠から園芸家をまもる方法」という章がある。ここに信号機と記述されているのは、紛れもなく腕木通信の信号機である。モンテ・クリスト伯は、パリとボルドーをつなぐ腕木通信の基地で働く通信手に彼の趣味の園芸の話で近づき、彼を大金で買収して、スペインのバルセロナで内乱発生との偽の情報を流す。クリスト伯の仇であるダングラール夫妻は、その情報をいち早く入手し、偽情報とも知らずに手持ちのスペイン公債を売り逃げる。翌朝その情報が事実無根であることがわかり、ダングラールは大損を被るのである。

本のページを繰っているうちに、気温の上昇とともに狭い寝室内はどんどん暑くなり、耐えきれず、とうとう女房の目をかすめて冷房のスィッチを入れた。心地よし。数分にして私は、昼食の時間が近いことも忘れて、安らかな昼寝に没入した。あとはお決まりの通り、目覚めればもう夕方である。

さて夕食。材料は昨日のうちに買ってあるので、あとは作るだけだが、長々と昼寝したので時間があまりない。今日はあまりに暑いので汁ものは省略。スタミナをつけるために、にんにくを効かせた韓国風の料理にする。菜は、スーパーの肉売り場で1割引で買った売れ残りのカルビ肉を、人参、玉ねぎ、いんげんと炒めることにしよう。増量のために厚揚げも加えることにする。味付けは、焼き肉のたれとキムチの素の組み合わせ。私が得意にしている味付けだ。そして飯は、先日から一度作ってみたいと思っていた牛肉と豆もやしの炊き込みご飯にチャレンジ。あとは、トマトとサラダほうれん草のサラダと、きゅうりの即席漬け。きゅうりを塩もみして酢と鷹の爪と一緒にビニール袋に入れる。すし酢少々を加えて甘みを出す。

ダイニングキッチンに冷房を入れることの了解が得られなかったので、汗だくになって、何とか定刻に夕食の準備完了。早速に食す。カルビ野菜炒め美味。きゅうりの即席漬けも好評。問題は初挑戦の韓国風炊き込みご飯だ。若干少なめの水加減にしたつもりだったが、もやしからの水分のせいか、かなり柔らかめの炊きあがりだ。しかしそれを除けば、なかなかの出来だ。

夜再び「IT全史」に挑む。面白いエピソード満載である。…無線電信を普及させノーベル物理学賞を受賞したグリエルモ・マルコーニが死後残した財産はわずかであり、それを歎いたデービッド・サーノフは「発明家とは、他人を富ませる人である」との名言を残した。そのサーノフは貧しい移民の子で、アメリカ・マルコーニ無線電信社に給仕で入り、やがて同社の無線通信士となり、たまたまニューヨークのある百貨店併設の無線局で夜勤をしていた時に、タイタニック号の遭難信号を受信した。その後三日三晩無線電信で情報を収集しメディアに報告し続けたという。やがて30歳でRCAの総支配人になり、彼が企画したボクシング世界ヘビー級チャンピオンのジャック・デンプシー対挑戦者ジョルジュ・カルパンティエ戦のラジオ中継は40万人が聴取したという。…

しかし、炊き込みご飯をどんぶりに3杯も胃に詰め込んだ影響か、ページを次々にめくって、逸話は興味深く読み進むのだが、情報技術の「生態史観」を期すとの、梅棹忠夫に私淑すると思しき著者の思いは、かなしいかな、満腹浅学の筆者には理解されないのであった。

牛肉と豆もやしの韓国風炊き込みご飯のレシピ（4人分）

〈材料〉 牛ロース薄切り3～400グラム（安い輸入肉で可。なるべく薄くスライスされたものがよい。一口大に切る）、豆もやし（子大豆もやし）1袋（軽く水洗いしてざるに上げておく）、長ねぎ10センチ（小口切り）、米3合、おろしにんにく小匙2、コチュジャン小匙1、いりこ出汁の素小匙2、白ごま大匙2、胡麻油、一味唐辛子、醤油、砂糖、酒、キムチ

（1）米は研いで洗ってざるに上げ、30分程度おく。
（2）牛肉に醤油小匙1、酒小匙1、おろしにんにく小匙1、胡麻油小匙2を振り、もみこむ。
（3）炊飯器に米3合を入れ、2.5合の目盛ぐらいの少なめの水加減にし、いりこ出汁の素、おろしにんにく小匙1、醤油小匙2、砂糖小匙2を入れ、牛肉を1枚ずつ広げて入れ、上からもやしをのせる。（炊飯器に炊き込みご飯のメニューがある場合は当該メニューにセットして）炊飯器のスイッチを入れる。
（4）ねぎに砂糖小匙1、コチュジャン小匙1、醤油小匙1、一味唐辛子小匙1を加え、よく混ぜる。
（5）キムチ適量を粗く刻む。
（6）炊きあがったら、炊飯器の蓋を開け、大きく上下を返し、（4）と白胡麻大匙4を加えて、よく切り混ぜ、蓋をして保温状態で10分ほど蒸らす。
（7）炊き込みご飯を飯茶碗に盛り、刻んだキムチ少量をのせて食べる。
＊炊き込みご飯は傷みやすいので、残ったら冷蔵庫に入れることをお奨めする。